

# 花魁恋歌！ 藤兵衛吉 原に消ゆ！？ の巻

とりなんこつ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大江戸騒動記／棟平屋の軌跡／の三次創作になります。  
またもや社畜のきなこ餅様の寛大な許可を頂きましたので、公開させてもらいます。

# 目次

花魁恋歌！ 藤兵衛吉原に消ゆ!? の巻

・前 1

花魁恋歌！ 藤兵衛吉原に消ゆ!? の巻

・後 16



# 花魁恋歌！ 藤兵衛吉原に消ゆ!? の巻 · 前

「大旦那様。神田の六兵衛が参つておりまする」

仏間の襖を開けて新右衛門がそう言つてきたとき、儂こと棟平藤兵衛は仏壇に神頼みの真つ最中。

転生者である儂は、この時代に来るまでは決して信心深い方ではなかつた。

されど科学も医療も未発達のこの時代。儂のふわつとした知識で底上げこそ出来て

はいたが、現代に比べて出来ることはずっと少ない。  
そうなればあとは天へと祈る文字通りの神頼みしかないわけで、だからこそ今の儂は数珠をじやらじやらと鳴らして、神仏について先祖へも祈りを捧げていた。  
：あれ？ この場合の先祖って、転生前の儂の祖先もカウントしていいんじやろか？  
それはともかく。

「こりや新右衛門！ 儂はしばらく籠るから、誰も通すなと言いつけておつたはずだぞ！」

「申し訳ありません。されど、六兵衛が危急の事のことと/or/」

むう。こやつがこれだけ言うとなれば、六兵衛の奴、よほど切羽詰まっているのやも  
知れぬ。

神田の伝統ある染物屋を吸収合併して久しい。

特に売り上げも問題ないはずじやと記憶しているが、なればこそ六兵衛の要件が気に  
なる。

「分かった。座敷へ上げておあげ」

「ハツ」

客間にに行けば、件の染物屋の親方である六兵衛が座していた。  
しきりに手拭いで額の汗をぬぐっていた六兵衛だったが、儂に気づき立ち上がりようと  
する。

「ああ、いいから。そのままそのまま。さて六兵衛や。急ぎの用向きと聞いたが、何か  
あつたのじや？」

「…実は、久藏のことと/or/相談したいことが」

「ふむ」

久藏とは、儂が引き取つて教育していた孤児の一人。団体はそれなりだが武術はか  
らつきして、字はどうにか読めても計算には弱い。

ただ、愚直なまでに同じことを繰り返して倦むことを知らぬ性格に、こりや職人向きじゃなあ、と神田の染物屋へ預けて早数年。

「なんぞ久藏が失態でも犯したのかえ？」

「滅相もありやせん。今やアイツの染物の腕前は、店随一、いや、江戸で一番といつても差し支えありやせんぜ」

「ほう！ 大したものじゃな。して、その久藏がなんとしたのじや？」

儂が先を促せば、六兵衛は訥々と語り出す。

久藏の腕が良いのは先ほど六兵衛が証言した通りで、勤め始めて2年も経つた頃には、既に一人前の技量を身に着けた職人になっていたそうな。

商人の手習いでは馬鹿にされていた久藏も、一本独鉛の職人の世界では才覚があり可愛がられたようだ。

そして久藏が15歳の時。この時代では元服といつて成人を迎える年齢であるから、祝いも兼ねて親方である六兵衛ともども色街に繰り出した。

行つた先の吉原で、ちょうど花魁道中を目にすることになったのはきっと偶然だろう。

しかし、どうも久藏にとつては、とんでもなく衝撃的な出来事だつたらしい。

煌びやかな集団の先頭をしゃなりしゃなりと歩くは高尾太夫。

その美しさに一目惚れした久藏は、結局その日、吉原で筆おろしにまで至らなかつた。戻ってきた次の日からはボーツとして、仕事は手につかない。挙句、道行く女の顔が全て高尾太夫に見える始末。

こいつはいかん、と案じた六兵衛は久藏に説教する。

こら、久藏。太夫にうつつを抜かして仕事をあだおろそかにするんじやねえ。

でも、親方。おら、あんな綺麗な人を見たのは初めてで……。

綺麗といつてもしょせん花魁。おまえだつて金を出せば相手をしてもらえるぜ？

本当ですか!?

ああ。十両もありやあ大丈夫だろ。もつとも今のおまえの給金じや、貯めるのは五年もかかるうが。

十両ですね!? わかりました！ 親方、よろしくお願ひしますッ！

それから久藏は遮二無二働いた。

文字通り目の色を変えて仕事にいそしみ、なんと三年で十両以上の金を溜めたという。

「もう…」

話を聞き終えて儂は唸る。

「おそろしきは工口に賭ける執念の凄さよ。

そこに時代は関係ない。男だからね、仕方ないね。

「それで何が問題なのじゃ？ 約束通り連れていいつてやればいいではないか」

「大旦那さま、無体なことをおつしやらないで下さい。一介の染物職人であるあっしに、どんな伝手があるっていうんです？」

そもそも久蔵に金を貯めろといつたのは仕事に邁進させるため。どうせ五年も経つて金を貯めるところには、太夫への熱も冷めているだろう。

そう高を括った六兵衛を迂闊と責めるのは少々酷か。

されど、吉原の最高位である太夫に相手をしてもらうには、それなりのコネがなければ無理なことも事実。

「とはいって、六兵衛、おまえにも誰ぞ放蕩好きな知り合いぐらいおるじやろう？」

「そりやお玉が池の竹内蘭石つてえ懇意にしていたヤブ医者がおりましたけどね、ここ最近、なんとも人が変わった石部金吉になつちめえやして」

「医者か」

あー。

そういうえば、江戸の医療レベル底上げプロジェクトの一環で、ヤブとか腕の怪しい医者たちを小石川療養所にぶち込んで研修三昧をさせた覚えがあつたわー。  
「なので、こうなつたら、夜の暴れん棒将軍の異名を誇る棟平屋の大旦那にお頼みするしかねえと」

「ふむ…うんん!?」

なにそれ！ なにそのあだ名！

夜な夜な遊女たちに『余の下半身を見忘れたか！（ゲス顔』で、デデーンしているの  
儀！？

そんなどんでもないあだ名を付けられる覚えは——いかん、あり過ぎたわ!!  
「ごほんッ！ 力になつてやりたいのは山々じやが、今の儀はちと事情があつて色街と  
は関りが……」

「そこをどうか！ この通りでさあ！」

畠に額をこすり付けている六兵衛に、儀は困り果てるより先に感動していた。

元は儀が預けた孤児の話ぞ？

その子のために、引き取り手である親方が自らこうやつて頭を下げるなど、なかなか  
出来ることではない。

儂はしばし瞑目ののち。

「分かった。久蔵は儂にしてみれば息子のようななものじゃしな」  
ハツと顔を上げてくる六兵衛に笑いかける。

「そして、六兵衛、おまえにとつても息子のようなもんじやろう？」 親が子のために動く  
のに、道理を曲げてなんぼのもんじや！」

などとカツコよく決めてはみたが、実は儂、内心はウツキウキじやつた。

「んんく、吉原は久しぶりじやあ！」

吉原なんぞラブホテルとソープランドの集合体じやろ？

そう思つていた時期も、儂にはありました。

お歯黒溝を渡り大門を潜れば、そこはまさに別世界。

江戸の夕闇を庄して輝く、大人のエンターテイメントひしめく夢の国。

綺麗に掃き清められた大通りを進めば、

「いらっしゃいまし」

慄懾に頭を下げる牛太郎に、飾りも煌びやかな引手茶屋が軒を並べておる。

「これ久蔵。あまりキヨロキヨロするでない。初めて来たわけではないじやろ？」

「でも、旦那さま、おら：」

「言葉遣いも気をつけよ。今のお前は島田屋の若旦那なのだからな」

そして儂は、若旦那に付き添う道楽者の隠居という設定。

もちろん島田屋は偽名じや。ペニシリソを卸したりしているためか棟平屋も有名になつてしまつたもので、今の儂は越後のちりめん問屋の「隠居よろしく、白い付け髭を装着。

服装だつて頭巾を被り、柿の木の侘びた杖を突いて、これで変装は完璧じや！

そして堅物な新右衛門は留守番じや！

「あ、棟平屋の旦那。ご無沙汰しております」

速攻でバレた。

解せぬ。

「う、うおつふおんツ！ わ、儂は島田屋の隠居じや！ そしてこつちは倅の久藏じやぞ！」

棟平屋？ 知らない子ですね：とばかりに言い返すも、牛太郎は目を細める。

「なるほど、今回はそういう趣向の見立て遊びですか」

今回とかいうなや！

儂は狼狽しつつ、きよとんとしている久藏の背中を押す。

「今日は俺が主役じゃ。さつそく茶屋へと上げておくれ」

吉原の入口からほど近い建物は、そのほとんどは引手茶屋である。いきなり上級遊女とベッドインということはまずない。

この茶屋の二階で宴席を設け、そこに遊女を呼んでもらつて宴会。

そののちに、茶男の案内で見世（店）へと上がるという手法を踏む。ちなみに遊女がいる店の前面は格子張りだ。必殺シリーズなどで依頼料を捻出するために身を売った女性などが並んで「お兄さん遊んでいかない？」などと声をかけるアレである。

そして見世にもランクがあつて、店の前にある「籬」まがきと呼ばれる格子まがきが大きければ大きいほど、その店のランクが高いことの証明となる。これを称して大籬おおまがきという。豆知識な。

「それでは、今日のお相手はどちらの……？」

「三浦屋の高尾を呼んでおくれ」

引手茶屋のご新造の表情が微かに翳つた。

太夫ともなれば、それこそ予約でいっぱいである。

だがそこは儂のコネでどうにか段取りをつけたはずだぞ。

ひよつとして太夫の具合が悪いのか。それともなんぞ他の事情が？

ところが、儂が訊ねようと口を開くより早く、久蔵が懐から小判を取り出していた。

「金ならありますッ！」

畠の上に並べられたは十三両の小判。江戸では一家四人が一年暮らせて釣りがくるほどの大金じや。

加えて、粹といなせを愛する吉原でこれ見よがしに金子を広げるのは、あまり行儀が良い行動とは言えん。

それでも儂の目には、その金はすこぶる尊く映る。

興奮で顔を真っ赤にし、真摯な眼差しをぶつけてくる久蔵に、ご新造も何かしら感じ入るところがあつたのだろう。

「――承知致しました」

スッと頭を下げてご新造が座敷を出ていく。

「ふうむ」

と儂も溜息をついて肩の力を抜けば、久蔵がオロオロし始めた。

「だ、旦那さま！ おら、とんでもないことを…」

「いやいや、ナイスな啖呵じやつたよ。その大事な金は仕舞つておき」

なあいす？ と首を捻る久蔵に、若旦那としての立ち振る舞いの最終レクチャーを施す。

「座敷の支度が整いましてござります」

「ご新造に連れられて向かつた座敷には、既に太夫が待ち構えていた。

綺麗に結い上げられた桃割れの髪に、小さな小さな瓜実顔。

切れ長の目元も涼やかに、ゆるつと引き締められた可憐な唇には鮮やかな朱が引かれており苺のよう。

その美貌は、煌びやかな着物を圧倒して余りある。

この時代の女性つてあんまり儂の趣味には合わんと思つておつたが、やはり太夫は別格じやなあ……。

「ほれ、久蔵。いつまで見惚れておる」

ボーッと突つ立つている久蔵の背中を叩く。

「申し訳ない。ウチの伴は、三年前に太夫を見初めてからそれはもう一途でのう」

「まあ……」

コロコロと笑う太夫の方へ、ぐいと久蔵を押し出す。

「あとは二人で、な」

そういって襖を閉じれば、ミッションコンプリート。

肩の荷が降りた反面、今日、久蔵が太夫を抱くことはないだろう。

気に入らない客には何両積まれても抱かれないと、という太夫のプライドの話ではな

い。

初めて上がった客とは宴席を共にするだけで一緒に寝ることはない。これを『初会』。その次の逢瀬が『裏』、都合三度目でようやつと『馴染み』となり、一緒の床につけるという作法でありしきたり。

思えば六兵衛も罪なことよな。あやつも久蔵が太夫に相手をして貰えるといつても、単に会えるだけのことを伝えておらん。

むろん儂もそれを責めるつもりはない。

吉原に身分差はないとはいえど、しょせんは久蔵は一介の染物職人。おそらく十三両も身を削って貯めたに違いない。いくら若いからといって、それをあと二回繰り返すのは無理というものじやて。

されど、一度なりとも座敷で太夫と酌み交わしたとあれば、一生を支えるだけの思い出になるじやろう…。

どれ儂も酒でも一杯、いや、せつかくだから遊女の誰かとウヒヒ…などと考えておると、背後から肩を叩かれる。

酒肴の載つた盆を抱えたご新造だつた。

「旦那様、こちらへどうぞ」

梯子段を降りて連れていかれたのは一階。そこから奥まつた廊下の行き止まりと

思つたら、正面の壁が開く。

そこの狭い階段を登れば小さな板の間があり、ここはちょうど太夫たちのいる部屋の隣あたり。

「ちよいとのぼせ上がつた初顔さんが無茶をなさらないように、ね」

『新造の説明に、儂は驚かない。

鬼平犯科帳とかでも、料理屋には大抵こういう覗き……いやいや監視部屋があつたもの。

掛け軸の隙間に隠された覗き穴から、座敷の様子は丸見え、丸聞こえつてヤツ。

なんか儂、マジックミラー号みたいでワクワクしてきてたぞ。

『お、おら……じやなくて、わたしの名前は久蔵と申しますッ！』

久蔵が口を開くが、さつそく危なつかしい。

『これはこれは丁寧に。あちきは高尾と申すものでりんす』

対する高尾太夫は全く動じる様子はない。むしろ微笑ましいものを眺める余裕が感じられる。

いやさ、前に別の太夫と宴席を共にする機会があつたんじやけど、気づかいとか凄いのよね？

笑顔や合いの手を入れるタイミングも完璧でさ、もう会話するだけで話が弾んで楽し

いのよ。

和歌、俳句、囲碁、将棋、小唄となんでも出来て、教養があるからどんな話題にも即時対応、理解力も半端ない。

なんせ儂の特注秘蔵の遊○王のカードゲーム（イラスト：歌川広重＆葛飾北斎 フレバーテキスト：滝沢馬琴）のルールを一発で理解できたらいいじゃもの。

もちろん勘の鋭い太夫のことじや。きっと久藏の所作から身分を偽つていることを察したに違いない。

それでいて、気づかない風に振舞うというのが一流のサービスというヤツなんじやろうな。

なんて思ついたら、久藏がぶつちやけた。

『す、すみません！ わたしは…じやなくて、おらはただの染物職人なんです！ でも、初めて吉原にきたときに見た花魁道中の高尾太夫に一日惚れして…!』

隣の隠し部屋で酒を噴く儂に構わず、久藏は滔々と今日に至るまでの出来事を語つた。

道行く女の人の顔が全て太夫に見えてしまったこと。

仕事が手につかず親方に叱られて、だつたら金を貯めて合いに行けと言われたこと。なので三年間、必死で金を貯めたこと。

大恩人である棟平屋の旦那様に今日、連れてこられたこと…。  
最後の儂の部分は余計じやね?

ともあれまったく悲壮な感じのしない告白だつた。

むしろ、憧れの太夫に会う為だけの懸命な思いの積み重ねに、不覚にも儂の心も揺さぶられたほど。

じつと黙つて耳を傾けている風の太夫じやつたが、聞き終えて「ぼんぼん」と手を叩く。

覗き穴から見れば、禿、つまりは遊女見習いの少女が、スーツと廊下の襖を開けるところ。

しゃなりと太夫は立ち上がり、久藏の手を取つて立たせている。

そしてそのまま二人は座敷を出ていつてしまつた。

向かつた先はきっと妓楼で――儂はご新造と顔を見合わせて啞然とする。

あれ? 作法としきたりはどうなつたの?

# 花魁恋歌！・藤兵衛吉原に消ゆ!? の巻 ・ 後

早朝の吉原からの帰り道。

儂の隣を久蔵が歩いておつて、二人揃つて朝帰り。

ゆっくりと白みは始めた空に、澄んだ空気が清々しい。

：断つておくが、儂が久蔵と朝チユンしたわけではないぞ？

「旦那さま！　おら、あんなふうに優しくされたのは初めてで…」

興奮気味に訴えてくる久蔵の話は、もう何度目じやろ？

「それに、太夫が言つてくれたんです！『わたしはあと五年で年季が開けます。そのとき、久さんがお嫁に貰ってくれますか？』って!!」

リップサービスだとしても、正直うらやまけしからん！

初体験が最高の美少女でおまけに結婚の約束つて、それなんてエロゲー？  
まったく、久蔵のどこが今を時めく高尾太夫の琴線に触つたものか。

なーんて考えて、実は少々心当たりがないわけでもない。

昨晩、久藏と太夫が消えたあと、ご新造と交わした会話を思い出す。

遊郭で一番人気なのが花魁なわけで、そのご贔屓は数限りなく。

中でもとある大名筋の大身から、高尾太夫の身請けの申し出があるそうな。

身請け自体は、太夫を始めとした遊女たちにとつて理想のゴールと言える。

なんせ借金や何やらで、巷では二進も三進も行かなくなつて苦界へと身を沈めたわけじやなからな。

その借金を返してもらつて、あとはそれなりに贅沢な暮らししが約束されているとなれば、飛びつかない方がおかしい。

にも関わらず、高尾太夫は全く乗り気ではないのだという。

これは例の殿様がねちつこいのか何なのかは知らんけど、渋るご新造から、儂は一晩かけて殿様の名前を聞き出すことに成功。

「伊達陸奥守、か？」

伊達とあれば、言わずもがな仙台藩である。

その開祖は、その名も高き独眼竜。

ならばその子孫も、少なからず祖先に似ているだろう。儂としては極力関わり合いたくない人種である。

「へ？ 旦那さま、いま何か仰いましたか？」

儂の咳きを拾つた久藏に、「なんでもないよ」と言い返して前を向きなおつた時じやつた。

場所は衣紋坂を下つたあたり。

朝靄に包まれた路地から、わらわらと数人の若い衆が出てくる。

「なんじや、おぬしら？」

いずれも柄の悪そうなオーラを発散していて、今更ながら新右衛門を連れてこなかつたことが悔やまる。

でも仕方ない。新右衛門には儂の不在を取り繕つてもらわにやならんのじや！

「へへへ…。旦那方には恨みはないが、少々痛めつけろつて命令でしてね…」

どこの誰ぞか知らんが嘘つけ！ そのこん棒はともかく、そつちの鎌は刃物で明らかにオーバーキルじやろ？

くつ、儂は暴力はからつきしの頭脳労働専門なのじや！ なんて言わずに鍛えておけば良かつた！

どうにか久藏だけでも逃がして…。

「はわわ…」

どしん、と音が聞こえたと思ったら、久藏が腰を抜かした音じやつた。

氣付けばすっかり儂らは囮まれていて、助けを求めようにも人通りもない。

「これは万事休すか……!?」

「てめえら何をやつてやがるんだ!?」

早朝の路地に、よく通る声が鳴り響き。

一人のお侍らしき風体の男が、衣紋坂を駆け下りてくる。  
お侍は、儂と久藏、それを取り囮むチンピラを眺めて一瞬でどちらに味方をするか定めたらしい。

「おらッ!!」

さつそくチンピラの一人を蹴飛ばして、別の一人は殴り飛ばす。  
いやその強いこと強いこと。

「くッ、てめえら引け引けッ！」

アツという間にチンピラどもは退散していく。

「つたぐ、どこの野郎どもだ？……ああ？ 大迫屋の若い衆つてか」  
お侍が、チンピラの脱ぎ捨てていった羽織りの屋号を見ている。  
ふむ、大迫屋か。

最近、裏でキナ臭い取引をしていると専らの評判じやが、これで何となく筋書きが読めてきたぞ……。

それはともかく。

「お侍さま、ありがとうございます。おかげで命拾いいたしました」

儂は丁寧に頭を下げる。

「なあに、いいってことよ。こちとら、朝帰りのいい運動になつたつてところさ」

洒脱に笑う声に儂は顔を上げ——凍り付く。

野生の和多田辺拳が立つていた。

：伊達ええええええええええええ！？

戦国DQN筆頭！？ ナンデエ！？ ドウシテエ！？

と、おおおお落ち着け儂！ どう見てもこの拳さんの片目は潰れてはおらんではない  
か。

されど、極力関り合わないのが儂の基本スタイル。この江戸を生き抜くための小悪党  
のジャステイス。

「お、お礼といつては不躾ですが、これを…」  
儂は素早く懐紙に包んだ小判を差し出す。

「…いいのか？」

「いえ、命を助けて頂いておいて、この程度の些少で申し訳ありませんが」

「そういうことなら遠慮なく」

照れ笑いを浮かべた拳さんは、素早く袂に小判を仕舞い込む。

その所作は、実に男らしくて色氣があつた。

「こつちこそ助かつたぜ。うちにやあ大喰らいの婆アがいてよ！」

陽気に手を振つて去つていく拳さんを見送り、儂はほつと胸を撫でおろす。

どうやらこの拳さんは御家人だつた様子。

良かつた。ドMで米俵にちんちんを突っ込んで鍛えている同心の方じやなくて本当  
に良かつた…！

日付が飛んで、儂はめ組の住居の前までやつてきていた。

もちろん用心のため新右衛門を従えて、付け髭で変装済み。

「ちよいとお邪魔しますよ」

「あら、棟平屋の旦那、いらっしゃい」

速攻で変装がバレた。

もうどうでもいいや。

「嵯峨屋の落雁に、浅草寺前の茶店の草団子ですじゃ」

め組の女将に手土産を渡す。

「あらあらまあまあ、勿体ないことでござります！ いま、お茶を淹れますので、どうぞ中へ：」

「いえ、その前に、徳田様は…」

儂が女将とやりとりをしていると。

「おう、棟平屋。どうしたのだ？」

奥の暖簾を上げて、徳田新之助こと上様が姿を現したのだった。

「して、棟平屋の大旦那様が今日はいかが致しましたので？」

め組の女将が茶を置きながら尋ねてくる。

「ちよいと近場まで用足しがあつたので、ついでですよ  
しつと儂は答える。

周囲にはめ組の若い衆。正面には徳田様を据えて、儂はいかにも茶飲み話でございと  
いう風情で語った。

もちろん内容は先日の遊郭でのことである。

儂のところの若い衆が高尾太夫を見初めたと思つたら逆に見初められたこと。  
しかし、その高尾を伊達陸奥守が身請けしようと画策していること。

適当に脚色を入れたおかげで、太夫が久蔵に『嫁に貰つてもらえますか?』の件では、  
女将に女中も涙ぐんでおつたわ。

そして伊達陸奥守が動こうとしているところでは、め組の若い衆が憤慨していた。

昔から権力者に仲を裂かれる男女という話は珍しくないからのう。

最後に儂は、徳田様を見据えて、どうやら伊達陸奥守様の後ろには大迫屋の動きがあ  
ることを伝える。大迫屋の若い衆に、吉原の帰り道で絡まれたことも含めて。

すると、茶を飲み終えて徳田様は一言。

「棟平屋。どうしてこのような話を俺にした?」

「なあに、茶飲みついでの艶っぽいお話でもと思つただけですよ。それに徳田様は、吉原

なぞに行く機会はありませんでしようからなあ  
「こやつめ」

苦笑する徳田様に、儂は布石を打ち終えたことを確信する。

これで徳田様は伊達家と大迫屋の関係を調べてくれるだろう。

儂なりに調べさせても良かつたが、やはり大名相手となれば上様にご出馬願うしかない。

いつそ大迫屋と伊達様が盛大に癒着や抜け荷や人身売買やらをかましてくれていれば、一切合切上様のデデーン！ で済むのじやが。

「さてと」

め組を出た儂は、もう一つの布石、もとい確認をするため吉原へと向かう。もちろん今度は新右衛門付きでな。

昼の吉原は、夜の煌びやかな様子も一転、ひつそりとしておつた。

その様子はまるで化粧を落とした女のようだ、とは誰が言つたのか。

大手門を潜つて、儂が真つすぐ向かつたのは三浦屋。

「ちよいとごめんなさいよ」

「これはこれは棟平屋の大旦那さま」

またもや速攻で変装がバレる。

儂は泣かない。

奥の座敷から弾けるように出てきた主人へ、高尾太夫に会わせてくれるよう頼む。

夜の太夫に会うにはそれこそ予約で満杯だが、昼間こうして尋ねてくる分には、会おうと思えば会えるのだ。

もつとも儂は吉原でVIP扱いされているからで、他の大店の主人とかは知らんよ?

「高尾でしたら、ちようどいま琴の稽古で先生の所に…」

言いかけた主人の視線に気づき、儂は振り返る。

ちようど暖簾を潜つて、絆の着物を着て琴を抱えた少女が店の中へと入つてきたところ。

小さな顔に大きな瞳。

つん、と上を向いた鼻も愛らしく、あどけなさがたっぷりと残つた彼女は——なんと、高尾太夫なのか?

「あら。棟平屋の大旦那さま。こんなにちわどす」

…たまげたなあ。久蔵と大して齢は変わらないのではないか?

「う、うおっほん！ 先日は、儂のところの若い衆が世話をなつたのう」

久蔵自身がぶつちやけているので、儂も取り繕うのは止めた。

「それでのう。その件で、ちと話があるんじやが…」

三浦屋の主人の計らいで、奥の座敷へ案内される。

茶を置いて禿が去れば、あとは儂と高尾の二人きりじや。

「单刀直入に訊ねるが、太夫はどこまで本気なのじや？」

久蔵への嫁入り志願。リップサービスとしたら大袈裟過ぎる。

「本気も本気でありんすよ」

けろりと答える高尾。

「源平藤橘の四姓の人とお金で枕を交わす卑しい身を、三年も思い詰めてくれるとは、なんと情けのあるお方…」

まだ幼さのある顔つきで、ついた溜息の深さに儂は絶句する。

さすが花魁の最高位である太夫を獲得しただけのことはあるわ。この若さで、おそらく儂の想像を絶する経験を重ねて来たに違いない。

「されど、大身に身請けされれば、あとは極楽な生活が送れるのではないか？」  
儂がそういうと、高尾はふつと笑う。

「しょせんあちきも苦界に咲いた徒花。枯れて色が抜け落ちれば誰も相手はしてくれません。道端に打ち捨てられるがオチでしょう」

「つまり、久蔵はずつとおぬしを大切にしてくれるということかの？」  
高尾は答えない。代わりにどこか遠くを見る表情で呟く。

「あたしの父親てつおやは職人でした。とても誠実な人で、久蔵さんは同じ手をしていました」

言葉使いを改めた高尾の告白。

彼女がどういう経緯で花魁となつたのか、詳しくは儂も知らん。

それでも、これは太夫ではない高尾の本心ということでいいはずだ。

「あい分かつた。久蔵にはせいぜい五年後を楽しみにしておけと伝えておこう」  
「よろしくお頼み申し上げます」

二コリと笑う高尾に、先ほどの影つぼさは一切なかつた。

これだから女は怖い、と呴きながら座敷を出れば、「ちよいと旦那様…」と三浦屋の主人に袖を引かれる。

なんぞ、どうした？

詳しく述べれば、例の伊達様の身請け話は勝手に進んでいて、つい先日も金子を持つて

乗り込んでこられて三浦屋も難儀しているとのこと。

肝腎の太夫にその気がないのだから、まとまるものもまとまらんわけで。ふむ。

これはあまり時間がないのやも知れんな。

それから幾晩が過ぎ。

新右衛門を従えた儂は、商家の影からそつと大きな屋敷を眺めている。

仙台藩江戸屋敷。

さきほど中に大迫屋が入つていったのは確認済みじや。

「どれ、行つてくるかの」

「大旦那様。やはり拙者が一緒に…」

「いいからお前は控えておれ。ここから一町ほど下がつて、しばらく屋敷へと近づいてはいけないよ」

「しかし…！」

「儂は話をしに行くだけじゃ」

渢る新右衛門を無理やり説き伏せる。気持ちは有難いが、ここでこやつに出張られては、儂の乾坤一擲の策が成らんのだから仕方ない。

「開門！　開門！」

屋敷の門を叩く。

何者だ？　の誰何の声に、

「手前は島田屋と申します。今宵は、伊達のお殿様に、吉原の件でお話したいことが

⋮

ごとり、と門の外れる音がして門が開いた。

家来らしき侍に連れられて案内されたのは中庭。

そこからは座敷の様子も丸見えの、いかにもな口ケーションじや。

座敷には、大迫屋と伊達の殿様らしい男が座っている。

どちらも脂ぎつてているというかオイリツシユな見た目に、正直ゲップが出そう。

「⋮島田屋といつたか？　吉原の話といつたが、どういうことだ？」

ジロリと伊達様に睨まれる。

「はい。殿様は高尾太夫を身請けしようとしているとか。しかしながら、太夫は健気にも年季明けを待つて市井に嫁ぎたいとのこととして」

「ふんツ！ 花魁なんぞしよせん売り物ぞ？ 高値でワシが手に入れて何がおかしいの  
じゃ!?」

「伊達様の仰られる通り岡場所の沙汰も金次第。島田屋といつたか？ おまえさんに口  
を出されるいわれもないわッ！」

追随するように大迫屋が吠える。

「もつとも、うちの店のように大金を用立てられるのならば話は別だがな！」

なるほど、やはり伊達様をバツクアップしていたのは大迫屋か。ついで儂らに痛い目  
を合わせようとしたのは陳腐な独占欲と見た。

なので儂は叫ぶ。

「できらあツ！」

「…いま、なんと言つた？」

「同じだけ金子を積んで、高尾太夫を身請けできるといつたんじやよ！」

「こりやあ面白い！ ならば、うちが出した同じ金額で太夫を身請けして見せてもらお  
うか！」

「え？ 同じ金額で太夫を!?」

「…馬鹿にしているのか、貴様はツ！」

大迫屋が激昂して掴みかかってくる。

その拍子で、儂の付け髭が飛んだ。

「ぬツ?! 貴様は、棟平屋ツ!」

驚く大迫屋。

なんと変装が通じていた。

思いもよらぬ展開に、儂感激。

「大迫屋! 棟平屋とはなんじゃ!?!」

「え、江戸でも指折りの大店でござりますよ! そうか、棟平屋ともなれば、あれだけの金額も…!」

大迫屋がめっちゃ動搖しているけど、儂はそんな金額を出す予定はないよ? ただ、さつきのやり取りをしたかつただけよ?

やり遂げてニヤニヤしている儂の前で、伊達様と大迫屋が顔を見合わせている。

「…いくら大店の亭主といえど、辻斬りに会うことは避けられまい。もしくは酒に酔つて堀に落ちたとかな」

伊達様サイドが物騒なことを言いだすのは想定内。

正直、賭けの部分が大きいが、おそらく成功する。そしてそのリターンは計り知れない。

「…なるほど。では、あの始末はお任せを」

大迫屋はニヤリと笑い。

「うむ。曲者じや！ 出会え！」

伊達様の声に、わらわらと出てくる近侍の家来たち。

「勝手に我が屋敷に忍び込んできた狼藉ものじや！ 早々に討ちとれい！」

儂の前に来た家来が、ギラリと刀を振りかぶる。

南無三！

儂が祈つたその瞬間、びゅーんと一枚の扇子が飛んできて家来へと命中。やつた、これで勝つる！

すかさず儂は上様の登場シーンを邪魔しないよう庭の隅へと退避。

予想通り、上様は儂の危急に駆け付けてくれた。

これだけでちよつぴり嬉しいのだが、ここで上様の活躍を目の当たりにするのが今回の作戦のキモ。

全てが落着して、上様の正体を知ることが出来れば、め組の辰五郎のようなポジションゲットだぜ！

商家としても上様サイドに取り込まれるのがベストなのはいうまでもない。なにせ江戸最強の国家権力じやもん。

策成れば、儂も命を張った甲斐があるというものの。

クククつ…まさに圧倒的ひらめき…つ！ 悪魔的天啓…つ！

内心でほくそ笑む儂の前に突如現れたのは、まさに闇に舞い降りし天才。いや、しげる違ひじやつた。

されどこちらの御庭番衆のしげるはストロンガー。強い（確信

「そげپツ！」

大安心で気を抜いた儂のみぞおちに、拳が吸い込まれる。

なんで？ どうして？ フーン（気絶

「き、貴様何者だ！」

伊達陸奥守の誰何に、颯爽と登場した徳田新之助は大喝。

「うつけもの！ 余の顔を見忘れたかッ!?」  
「なッ?!」

伊達綱宗は目を見張り、すぐにその顔は青ざめる。

「う、う、上様?!」

「へ？ 上様ですと?！」

庭の砂利の上にたちまち額をこすり付ける綱宗とその家来に大迫屋。

平伏する彼らを見やり、徳川は八代将軍吉宗は言葉の刃を叩きつけた。

「伊達陸奥守綱宗！ そなたは仙台藩当主という大身の身でありがながら、権勢に飽かして大迫屋と結託し、嫌がる太夫を身請けせんと画策するは武家にあるまじき振る舞い。恥を知れ！」

「く……！」

「そして何より、江戸の生き仏と称される棟平藤兵衛を害しようなどとは言語道断！  
こうなれば潔く、大名らしくけじめをつけて見せよ！」

羞恥と怒りで真紅に染まつた顔を上げ、伊達綱宗は叫ぶ。

「ええいッ！ このような場に上様を名乗る不届きものがいらつしやるはずは飛んで火にいる夏の虫!! こうなつたらもはやこれまで！ 上様の顔は知らぬワシは毒喰らわば皿までくツ!!」

「なにを言つているのだおまえは」

思わず素で突つ込んでしまう吉宗に、近侍の者たちは主君の錯乱した命令にも忠実だつた。

次々と刀を抜いて構える家来たちに、吉宗も刀を抜いて峰を返す。  
はばき  
？に刻まれた葵の紋がキラリと光り、一方的な仕置きが始まつた。

「おう、才蔵。伊達の手下てかの者も誰も殺してはおらんだろうな？」

吉宗にそう呼ばれた御庭番衆随一の男は、静かに頷く。

「ご安心を。全て當て身で氣絶させております」

「うむ。さすがに仙台藩の当主を成敗するわけにも行くまいよ」

吉宗が苦笑する通り、伊達綱宗は大迫屋ともども砂利の上で氣を失つていた。

公儀は隙あらば大名の各家を取り潰そうとしている。それは紛れもない事実であつたが、さすがに大大名と称される仙台藩とあつては迂闊には取り潰せない。

ましてや今回の話の根っこは、花魁の身請け話に端を発している。

藤兵衛への殺害教唆は吉宗的には絶許だつたが、實際に人死には出ていないのだ。

さすがに將軍である自分に刃を向けたことは第三者から見れば死罪に相当するだろ

うが、ここはあくまで徳田新之助として相対したことで済ませることを吉宗は心に定めていた。

「ところで、棟平屋の方は…」

「離れた商家の軒下に、むしろを被せて寝せておきました。まもなくお付きの者が見つけましよう」

〔ゞ〕苦勞

短く才蔵を労い、吉宗は心の内でそつと呟く。

棟平屋よ。

俺の正体をおまえに明かすのは一向に構わぬのだが、俺は今少しおぬしとは気楽に茶を飲みかわせる関係でいいのだ。

だから、許せ。許せよ、棟平藤兵衛――。

そして藤兵衛の方はというと。

才蔵の言つた通り、仙台藩江戸屋敷よりちょうど一町ほど離れた商家の軒下で新右衛門に発見されていた。

主の無事を喜ぶ新右衛門の表情と裏腹に、

「…あれ？ やっぱり儂つて将来の上様の肅清リストに載っちゃつてゐるの…？」  
とガクブルしていたり。

伊達陸奥守綱宗様は、仙台藩へと戻つて隠居されたそうな。

当然、高尾太夫の身請け話も有耶無耶になつた。

そして大迫屋は私財没収の上、江戸払いを命じられている。

伊達様と結託し、その権勢を使って不正をしようとしていたらしい。

もつともこれらはかなり温情な措置と言えるだろう。

その裏に、徳田新之助こと上様の意向が働いているのは儂には分かる。

だつて元々は太夫を身請けするかどうかって話じゃん？

儂は殺されそうになつたけれど、実際に誰も死んでないわけだから、ここらが落としどころつてヤツなのだろう。

そんな上様の粹な計らいが一つ。

なんと、高尾太夫の身請け金として三浦屋へ持ち込まれたおよそ500両は没収の対

象とならなかつたのだ。

なので太夫は晴れて自由の身。

だからといって、今さら久蔵のところに降嫁はせんじやろうて。

そう寂しく思つていた儂じやつたが、ほどぼりも冷めた一年後。

神田の染物屋の前に、立派な籠に載つた高尾がやつてきたのには度肝を抜かれた。

『久さん。お元気でしたか？ 約束通り、わたしを貰つてやつて下さい』

そう艶然と微笑まれ、久蔵はその場に卒倒。

半信半疑で待ち構えていた儂もぶつ倒れそうになつたもん。

これまた半信半疑で準備していた祝言には、儂も媒酌人として参加。

盃を交わしたあとは、儂が提供した樽酒の大盤振る舞い。

噂の傾城を一目見ようと近所の衆がやいのやいのと押しかけて、あれほど盛大かつ騒がしい祝言は儂の記憶にもない。

祝言を上げたその後も、染物屋にはひつきりなしに見物客が押し寄せて困ると六兵衛のやつも愚痴つておつた。

そしてそれらも落ち着きを見せてきた今日。

夫婦となつた久蔵と高尾が、二人揃つて儂の屋敷へ挨拶に来るという。

なので儂もちよいと朝から氣もそぞろ。

そして可笑しいことに、堅物の新右衛門もどこかソワソワと落ち着かない様子。

「新右衛門や。ぬしも噂の太夫を拝むのが楽しみかえ?」

「いえ、決してそのようなことなど」

「隠さんでも良い。おまえの部屋の押し入れの天袋の上に、高尾太夫の錦絵を隠してあることは知つておるぞ?」

「な……！」

珍しく絶句する新右衛門に儂はにつこりとする。

男の口日本の隠し場所なぞ、古今東西同じじやよ?

「大旦那さま、ご無沙汰しております!」

玄関に姿を現した久蔵は、見事に垢ぬけておった。

その三歩後ろに付き従う風の高尾は、逆に花魁の頃の華々しさを欠いていた。

されどしつとりとした美しさは年相応で、影のなくなつた屈託のない微笑みに儂は悟る。

ああ、高尾は本当の幸せを手に入れたのじやな……。

「このたびは、本当に大旦那様にはお世話になりまして……！」

儂と顔を合わせるたびにペコペコと頭を下げる久蔵の挨拶は、完全に耳タコである。

相も変わらず律儀というか馬鹿正直というか。

まあ、高尾が惚れたのはきっと久蔵のこういうところじやろう。

そして高尾はと/or>うと。

「本当に旦那様は恩人です。あの晩に呼んで貰わなかつたら、きっとわたしは：」  
うんうん、廓言葉が抜けた高尾の口調も新鮮で良いのう。

そんな風に頬をニヤけさせる儂だつたが、背後にひやりと冷気を感じて振り返る。  
そこには儂の恋女房、おさよが立つていた。

腕に、生まれて数月ばかりの二人目の男の赤ん坊、藤次郎を抱えて。

「…旦那様？」

おさよの声に、儂は身体の芯まで震えあがる。

「ま、待ておさよ、誤解するな！ これはなッ！」

「私が身籠つている間、男の子が生まれるよう祈願するため色断ちをすると言つていた  
のは嘘だつたのですか：？」

この時代の医療では、もちろん男女の産み分けなど出来るはずもなく。

先だつて神仏と先祖に祈りを捧げておつた理由は、安産と藤太郎に続く男児の誕生を  
願つてのこと。

だつて息子たちと三角ベースをするのが夢なんじやもの、儂。

！」

「そ、それは嘘じやない！　じゃから、吉原にいつたのはちゃんとした理由があつてだな

ぐつとおさよに袖を掴まれる。

そして藤次郎を抱えたまま、おさよはさめざめと泣き始めた。  
やめて、その攻撃。儂に効く。

昔から、おさよの涙は儂特効。沸きあがる罪悪感に胸が押しつぶされそうになる。  
うう、こんなんだつたら刃傷沙汰になつた方がなんばかマシじや！

おい、新右衛門、そっぽを向いてないで助けておくれ！

久蔵も、そろそろ失礼しますじやない！　恩人のピンチじやぞ？　助けろよ！  
高尾もちやんと説明してくれ！　お願ひじやから！　ボスケテ：！！

世はまさに太平。

棟平屋の周囲は今日も平和で笑いに満ち溢れている。  
ただし、中心にいる藤兵衛を除いて。